

## 別科統合授業への教授法の提案

増山栄一エリック

【キーワード】 別科教育、日本語教育、言語教育、統合クラス、生涯学習、  
時事英語、教授法

はじめに：

2007年度前期の後半4週間ほどであったが、専任の講師の先生が突然休みを取ることになり、別科の午前中のリレー式のコアクラスの手伝いをしたことがあった。様々な理由で、現存のスタッフで、その専任の方の担当されている全クラスをカバーするのは不可能であったので、別科のレベル1と2の2つのクラスを統合した授業を、その4週間ほどの間行った。私は、土曜日の1限と2限目の統合授業を合計8回担当したが、正直言って、大変苦痛を感じながら、それらのクラスを教えなければならなかった。1限目のクラスでは、一番低レベルの学生に合わせた授業を行った為に、上級の学生には何も新しいマテリアルを学べないすべて復習の授業になった。また、2限目の授業では、個々の学生に合ったレベルの教材を使って行う「分校型」の授業を行ったが、自習学習になりがちで、教師との十分な質疑応答ができずに、学生にフラストレーションが溜まっていくのが分かった。上記の「低レベルフォーカス型」及び「自主学習分校型」の2つの教授法は統合授業でよく行われる。しかし既述のごとく、建設的な結果は得られない。

別科プログラムにおいて、その学生の殆どは中国人留学生であるが、学生ビザ取得問題で履修者が激減している現在、閉講に追いやられているプログラムは少なくない。経費削減が当然の対応策である中、アンダースタッフで授業を行うことを余儀なくされる。そこでスタッフに何か起きれば、今回の大東大の別科で行ったような統合授業が頻繁に行われる可能性が高くなってもおかしくはない。そんな時、どんな統合授業を教えることによって効果的な結果を得ることが出来るであろうか。

筆者はレベルが異なった学生たちを教授する時事英語の授業を昨年9月から某大学の生涯教育プログラムで始めた。前記した別科で経験した統合授業の難しさを念頭に置き、授業開始前から学生のレベルに差異があるクラスの効果的な教授法を模索し、また、初回の授業の際にも学生のバックグラウンドやニーズをしっかりと把握した後で、10週間に及ぶ『テレビニュースで時事英語に親しむ』と題されたクラスを教えた。授業の反響は芳しく、同科目の冬学期の履修者数は増加し、その70%が秋学期からの学生で、「面白い、興味深い」から再履修した、とのことだった。

統合クラスは確かに存在してきた。事実、著者も大東大の交換留学生を対象とした特別クラスの一つ『日本語演習A』では、様々な体験を通して様々な層の日本人とコミュニケーションを図り日本語を学習することを目標としていて、学生は自分の日本語能力

を最大限に活用して課題に臨めば良い。同様に、コンピューターのクラスやチュートリアルのような「選択科目」的で、個別指導が可能なクラスであれば統合授業はOKなのかもしれない。しかし、「必修」の日本語においてのそれは、学習効果及び学習意欲の減少につながることは否めない。しかし、別科の過渡期を迎えた今、違ったレベルの学生が集まった統合クラスを教えなければならない機会が増えてくるかもしれない。

この論文では、著者が教えた、様々なレベルの学生が集まった生涯学習時事英語の統合クラスでの教授法を紹介することによって、これから増えてくるかもしれない別科での統合授業の効果的教授法の提案を試みたい。

### 『テレビニュースで時事英語に親しむ』クラスについての詳細：

このクラスは、東京都品川区にあるS大学の生涯学習プログラムで受講できる講座の1つで、春学期10週間、秋学期10週間、そして冬学期6週間の週1コマ90分の通年クラスであるが、履修者は必ずしも春学期から連続して履修しなくてもよく、その他の学期初めからもクラス履修ができるオープンカレッジプログラムである。いつでも、そして誰でも取ることができるクラスであるが故に、その履修者のレベルには差異が存在している。そのようなクラスでは得てして、レベル差を考える必要のない教員主導型の教養講座になりがちである。しかし、私とそのクラスを教え始めた2007年の秋学期の第1回目のクラスで履修者のニーズを調査してみると、そのような教養講座的なクラスを望んではいなかった。以下は履修者がこの時事英語クラスに対するニーズである。

- インタラクティブなクラス
- 質疑応答ができるクラス
- リスニング上達させてくれるクラス
- 語彙を増やしてくれる授業
- TOEICの点数を上げるのを補助してくれるクラス
- 会社で英語を使うので、その援助になるクラス
- 発音矯正
- ニュースの背景にある社会・文化説明

様々なニーズに加えて、受講者は次のように異なったバックグラウンドを持っていた。

- 外資系商社勤務で毎日英語使用。TOEIC 800点
- 子供に英語を教授している。イギリス1年留学
- 大学以来、何十年も英語に接していない。
- 仕事はしていない。TOEIC受験の準備中
- TOEIC 650-680点。英文を読む必要がある。
- 海外勤務10年。仕事で英語を使う。
- 海外勤務6年。退職
- 英語を話すことない。仕事で読むことが多い
- 英語は大学まで勉強。別に英語を使うことはない。
- 夫の仕事で海外滞在。今英語を使って仕事

- 大学以来、何十年も英語に接していない。

従って、英語の習熟度が上記のように違う受講生とインタラクティブなゼミ形式の授業を行わなければならなくなったわけであるが、第2週目の授業開始までに、熟慮の上次のようなコースデザインで『テレビニュースで時事英語に親しむ』を教授していくことにした。

『テレビニュースで時事英語に親しむ』のコースデザイン：

巻末資料にある『テレビニュースで時事英語に親しむ』のコースシラバスにも少しは明記してあるが、著者はこのクラスで段階的アプローチを試みてみた。詳しく言えば、受講日に使うテレビニュースのビデオを1回(時によっては2回)見るたびに、学生たちはタスクを与えられて、それに答えていくのであるが、タスクを重ねるに従って、その難易度が高くなっていく段階式になっていて、学生はテレビニュースを100%理解知る必要はなく、自分の能力、もしくは自分の能力プラス $\alpha$ の理解を、それらのタスクを通して求められるクラスデザインにした。

例えば、2007年12月1日のニューストピックは“Under God”と題された特集で、アメリカの教育機関で毎朝生徒達が母国の旗に向かって唱えるThe Pledge of Allegiance(忠誠の誓い)の中に挿入されている”Under God”の一節が国の政教分離政策に反しているのではないかという内容である。The Pledge of Allegianceに関して巻末資料のプリントを用いて、その内容や唱え方等を説明した後で、巻末資料の**Exercise #1**: ビデオテープを視聴して、分かったことを書きなさいをビデオを見て、最初のタスクとして受講者に行ってもらった。毎週、受講者達は1週間前に、次週扱うテレビニュースとして一度同じ物を見せられていて、また、それについての英語で書かれたサマリーが予習用に渡されているので、内容はあらかじめ分かって12月1日の授業に出てきている。加えて、1日の授業の一番初めに、このビデオを見せられているので、この**Exercise#1**を行う時には、このビデオの3度目の視聴となっていて、ニュースのスピードや内容に次第に慣れてきている。

このタスクは、ビデオのニュースを視聴して、分かった事柄を日本語で書くエクササイズである。内容によって差異はあるが、分かる学生ではニュースの60-70%を理解できるが、10%から20%しか分からない学生も存在するのがこのクラスの特徴であるから、理解度が低い学生から分かった内容を聞いていき、次第に理解度の高い学生にジグソーパズルを埋めていくようにニュースの概要をクラス全体で形成していくのがこのタスクの最終目的である。この時に出て来た単語や表現等について質問したり、説明したりするが、理解度の低い学生に常に容易な質問ばかりするのではなく、もっと高度な質問もするし、理解度の高い学生といっても、100%理解しているわけではないので、シラバスにもあるように、常にクラスの一人一人が「自分の現在のレベルより、より高いところを目指して」学習してもらえらるような学習環境を作り上げられるように努力している。また、レベルの違ったクラスメートから学び合う学習環境を与えることで、自然な言語習得の環境の提供も意図している。

次のタスク、**Exercise #2**は、ビデオテープを視聴して、より細部を理解させる為に、

与えられた問題に日本語で答えさせるエクササイズである。問題の解答に加えて、Exercise#1でも行ったように、続けて単語や表現等について質問・説明してニュースの内容を次第に分からせていくが、各々の学生の習熟度は既に分かっているので、レベルに合った、もしくはそれよりやや高度な質問をし続けていく。嬉しいのは、「これは無理だ」と思った質問に学生が解答した時で、そんな時には心の底から、その学生を褒めて、その学生、及びクラスのモチベーションを高揚し、「自分だってできるんだ！」という自信をつけさせるように努力している。

英語を勉強しているのであるから、Exercise #3では、"Answer the following questions with either T (for True) or F (False)" というタスクを用いて、英語で内容を理解できるようなエクササイズを行う。理解力に差異があるので、問題は私が一つ一つ読んで、日本語の対訳をして、質問を全員に分からせてから、再度ビデオテープを視聴して、学生に答えさせていく。巻末資料を一目すれば分かるが、レベル差があるので、質問は容易な物から難易な物まで様々で、前述のタスク同様、すべてのレベルの学生が参加できるように意図されている。ここでもニュースに関する質問・説明を行い、ニュースの全体像を次第に暴いていく。

そして、次にやってくるタスクは、ニューススクリプトの数箇所を空白にした **Exercise #4: Fill in the blanks of the news script** と指示された穴埋めエクササイズである。これに関しては、1度ではなく2度ニュースビデオを視聴して穴埋めをしていく。前述のタスクと同様に、容易な問題と難易な問題とが混在している。Exercise#4の後には、ニューススクリプトの完全版を配布し、ビデオを聞きながらスクリプトを目で追い、それから、私がセンテンスを読みながら、対訳や説明を行い、内容や単語、そして表現等の最終理解を受講者に促す。最後には、巻末資料にあるように、1) その日に出て来た重要な時事英語単語の復習・説明、そして、2) 次週勉強するニュースの予習用のサマリーを配布し、そのビデオを視聴してクラスは終了する。

同じニュースを何度も視聴し、Exercise#1からExercise#4までのタスクを行い、質疑応答や説明をも行うことで、ニュースの内容を概要レベルからもっと詳細レベルで理解できるように段階的にアレンジしたのが、この時事英語のクラスである。受講者は、その段階的な学習プロセスの中で100%を理解する必要はなく、自分のレベルもしくは、それよりやや高いレベルの内容を学び、また興味を引く情報をランダムに自分のものにすればいい。

時事英語段階的教授法は別科統合授業で使用は可能なのか：

前述した2007年前期の別科での統合授業は、休みを取られた専任の講師の方が1ヶ月ほどで復帰されると分かっていたので、短期間の暫定的な処置として、4名の別科生が一番レベルの低い学生に合わせたクラスを行うという決断をくださったと聞いている。専任講師の方の休みも突然で、夏期休暇も迫っていたので、それが妥当な処置であったのかもしれない。しかし、もし余裕があったのなら、上記した段階的教授法で、その1ヶ月強のクラスを教えることは可能であったと思う。また、一般的に言っても、別科の統合授業で違ったレベルの学生たちを教授することは可能であると思う。

例えば、大東大の2007-8年度の別科プログラムの4名の学生を例にして考えてみよう。この4名の別科生はACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages)のProficiency Guidelines(Speaking) (下記参照)によれば、その当時、学生Aは「初級の中」、学生Bは「初級の上」、学生Cは「中級の中」、そして、学生Dは「中級の上」ほどのレベルであった。

**超級:** 超級レベルの話者は、正確で流暢な話し方でコミュニケーションをし、具体的抽象的双方の視点から、フォーマル/インフォーマルな状況でのさまざまな話題について、十分にしかも効果的に会話に参加できる。難なく、流暢に、しかも、正確さを保ちながら、関心のある事柄や特別な専門的分野について議論したり、複雑なことを詳細に説明したり、筋の通った長い叙述をしたりする。社会問題や政治問題など、自分にとって重要な数多くの話題について、自分自身の意見を明白にし、その意見を裏付けるために、うまく構成された議論をする。彼らは、別の可能性を探るために仮説を立てたり、その仮説を発展させたりすることができる。たとえ抽象的な詳述をする場合でも、不自然に長くためらったりせず、要点をわかってもらうために、必要に応じて複段落を展開する。そうした段落は、終始一貫しているが、その論理構成は、まだ目標言語より母語の影響を受けている場合もある。

**上級の上:** 「上級-上」の話者は、十分な言語的能力で自信を持って、楽に、上級レベルのすべての機能を遂行する。すべての時制の枠組みの中で、論理的に詳細を説明することができるし、完全に正確に叙述することができる。それに加え、「上級-上」の話者は、超級レベルで要求されるタスクにも対応するが、話題によっては、そのレベルを保ってタスクを遂行することができないこともある。彼らは、よく構成された議論を展開して、自分の意見を裏付けることができる。また、仮説を構成するかもしれないが、パターン化した誤りが見られる。彼らは、一部の話題については抽象的に論じることができるが、その話題は特に特定の関心事や特殊な専門分野に関係したものである。しかし、概して、さまざまな話題について具体的に論じの方が彼らには楽である。

**上級の中:** 「上級-中」の話者は、多くのコミュニケーション・タスクを、楽に、また自信を持って扱うことができる。彼らは、具体的な話題であれば、ほとんどのインフォーマルな場面と限られたフォーマルな場面でのやりとりにおいて、活発に参加することができる。具体的な話題とは、職場、学校、家庭や余暇活動にかかわる話題はもちろん、最近の出来事、一般的话题、個人的な関心事、またはそれらに関連した話題のことである。

**上級の下:** 「上級-下」の話者は、さまざまなコミュニケーション・タスクを扱うことができるが、時々多少もたついた話し方になることがある。彼らは、インフォーマルな状況ならほとんどの場合、フォーマルな状況なら限られた場合に、学校、家庭、余暇活動に関係した内容について、活発に会話に参加する。また、程度は少ないが、仕事や最近の出来事、個人的、一般的な関心事について、または自分に関連のあることについても参加することができる。

**中級の上:** 「中級-上」の話者は、中級レベルとされているごくありふれたタスクや社会的な状況では、楽に自信を持って談話を交わすことができる。彼らは、職場、学校、余暇活動、特定の関心事や専門的分野に関係した基本的な情報のやりとりが要求されるような、さほど複雑でないタスクや社会的状況なら多くの場合、うまく対応できる。ただ、明らかに口ごもったり、間違ったりすることもある。

**中級の中:** 「中級-中」レベルの話者は、単純な社会状況において、さまざまな複雑でないコミュニケーション・タスクにうまく対応することができる。会話は一般的に、目標文化圏において生活していく中で不可欠なもので、よくある具体的な会話のやりとりに限られる。その内容には、自分自

身や家族、家庭、日常生活、関心事、個人的な好みなどの個人的な情報はもちろん、食べ物、買い物、旅行、宿泊などの身体的・社会的なものも含まれている。

**中級の下:**「中級-下」レベルの話者は、単純な社会状況では、自分なりに文を作ることによって、限られた数の複雑でないコミュニケーション・タスクをうまく遂行することができる。会話は、目標言語文化圏で生活していくためにはどうしても必要な、具体的な会話のやりとりや、いつも出てくるような話題のうちの一部に限られている。これらの話題は、基本的な個人情報に関係したもので、例えば、自分自身や家族、限られた場面の日常活動や個人的な好みに関する話題、また、食べ物を注文したり、簡単な買い物をするなどの日常生活に必要なものなどである。「中級-下」レベルでは、話者は主として受け身であり、直接的な質問に答えたり求められた情報を提供しようとするので精一杯である。しかし、数は少ないが、適切な質問をすることもできる。

**初級の上:**「初級-上」の話者は、中級レベルのさまざまなタスクに対応することができるものの、そのレベルを維持できない。彼らは、単純な社会状況であれば、複雑でないコミュニケーション・タスクをうまく切り抜けることができる。会話内容は、目標言語文化圏で生活していくためにはどうしても必要なもので、よく出てきそうなわずかな話題に限られる。例えば、基本的な個人の情報、基本的な物、限られた数の活動・好み・身近な必要事項などである。「初級-上」の話者は、簡単で直接的な質問に答えたり、求められた情報を与えたりすることができる。しかし、何か質問するようになると言われると、決まり文句からなる数少ない質問しかできない。

**初級の中:**「初級-中」の話者は、数々の個別の単語と丸暗記した句を使って、習ったことのある場面に限り、最低限のコミュニケーションをやっとの思いで行うことができる。直接的な質問に答える場合も、彼らは一度に2、3の単語のみで発話するか、時折記憶している答えを発するだけである。彼らは、単純な語彙を探したり、自分自身や相手の言った言葉を繰り返し使おうとして、言葉がしばしば途切れてしまう。「初級-中」の話者は、口ごもったり、語彙が足りなかったり、正確さに欠けたり、適切に答えられなかったりするために、外国人に慣れていて好意的な相手にさえ、理解するのが難しいことがある。中級レベルの機能を含んだ話題を扱うように要求された場合は、彼らはしばしば、語句を繰り返したり、母語を使用したり、沈黙したりせざるを得なくなる。

**初級の下:**「初級-下」の話者は、実際に何の機能も果たすことができず、発音の悪さから、理解されずに終わることもある。時間が十分に与えられ、聞き慣れたきっかけがあれば、挨拶を交わしたり、自分の名前を言ったり、ごく身近なよく知っている物の名前を挙げたりする事ができることもある。彼らは、中級レベルの話題を扱ったり機能を遂行することはできない。真の意味での会話のやりとりはできないということである。(ACTFL Proficiency Guidelines より)

別科では『みんなの日本語』のIとIIの利用を基本としていて、例年ではレベル1、2、そして3と分けられているクラスで、その年の学生のレベルに従って、『みんなの日本語』のスタートレッスンを決定する。筆者が6月の終わりに統合クラスを教え始めた時には、学生Aに合わせて『みんなの日本語』のL. 15あたりを教えていた。学生CとDは母国の中国で既に『みんなの日本語』IとIIを終了してきているので、いくら復習は必要であっても、90分のクラスに座っているのは内容的に退屈であったはずだ。

すべての学生が新しいことを学ぶことが出来る統合クラスを教えるには、まず適切な教材作りに時間をかけなければならないと思う。レベルに少しの開きがあっても、学生AとBはレベル1のクラス、そして学生CとDはレベル2のクラスに元々プレースされ

ていて、新しい単語、表現、文法等をそれぞれのクラスで教えられていたのであるから、統合クラスになっても、そこは変更されるべきではないと思う。2つのクラスで教えるべき新しいマテリアルを盛り込んだ統合クラス用の教材を作って教えることが必要だと思う。著者が時事英語教授に使用したような文化社会に関するレポート的な教材が学生の興味を引くと思う。別科では2007-8年度にはリスニング専用のクラスは用意されていなかったのも、著者が時事英語のクラスで使用したようなオーディオ・ビジュアルの教材を製作してペーパーマテリアルの教材と併用していくと一層効果的だと思う。

著者が時事英語教授で行ったように、最初は概要的な理解から始まって、新しい単語、表現、文法等を徐々に導入していくことで、教材の詳細に向かって段階的に授業を進めていく。学生AとBが新しいマテリアルと格闘している時、学生CとDにはそれが復習となる。しかし、復習ばかりでなく、CとDにも覚えなければならない新しい単語や表現や文法等がある。ここで大切なことは、AとBが覚えなければならないこととCとDが習得しなければならないそれを学生たちに明確に伝えておく必要がある。筆者の生涯学習のクラスでは、受講者は、その段階的な学習プロセスの中で100%を理解する必要はなく、自分のレベルもしくは、それよりやや高いレベルの内容を学び、また興味を引く情報をランダムに自分のものにすればいい。時事英語の受講者は社会人で、土曜日という休日に大学に足を運んで、楽しみながら教養を身に付けに生涯学習プログラムでクラスを履修している。しかし、別科は大学で十分にやっつけられる日本語能力を学生に習得させる予備校的プログラムであるから、覚えるべき事柄はしっかりと学習されなければならない。従って、筆者の時事英語のクラスの最後に「今日の単語リスト」が配布されて、受講者たちに、それらを覚えることを勧めるが、それと同様に、「今日の単語、表現、文法等リスト」を作成して配布し、今日勉強したことをしっかり認識させて、後日の復習テストにつなげていくべきである。

上記の『テレビニュースで時事英語に親しむ』のコースデザインのセクションでも述べたが、レベルの違ったクラスメートから学び合う学習環境を与えることで、自然な言語習得の環境が提供されて、個人的に言って、私は統合クラスに関して否定的な考えを持ってはいない。

#### 結論：

専任講師の方の突然の休みで、統合クラスを1ヶ月ばかり教授する機会を得て、その効果的な教授法がないものかと模索していた時に会ったのが、某大学の生涯学習の時事英語のクラスであった。大東大別科での統合クラスの教授の困難さを経験していた筆者は、違ったレベルの学生が集まった、その時事英語クラスを10週間教える中で、ビデオニュースの概要から細部に向かって次第に、そして段階的に教えていく教授法を考え出し、学生はテレビニュースを100%理解する必要はなく、自分の能力、もしくは自分の能力プラス $\alpha$ の理解を、それらのタスクを通して求められるクラスデザインにした。常にクラスの一人一人が「自分の現在のレベルより、より高いところを目指して」学習してもらえらるチャレンジングな学習環境を作り上げられるように努力し、また、レベルの違ったクラスメートから学び合う学習環境を与えることで、自然な言語習得の環

境の提供も心がけた。

様々な理由で、今別科が過渡期を迎えている今、統合クラスを教える状況が生まれた時には、筆者が教えた時事英語での統合クラス教授法を別科で利用できると考え、2007-8年度の別科学生たちを統合クラス対象者と仮定して、コースデザインを創造してみた。殆どの箇所、時事英語で用いた教授法を用いていけば良いが、一番重要なポイントは、違ったレベルの学生が各自覚えなければならない新しい単語、表現、文法等を盛り込んだ統合クラス用の教材を作って教えることの必要性である。筆者の生涯学習のクラスでは、受講者は、その段階的な学習プロセスの中で100%を理解する必要はなく、自分のレベルもしくは、それよりやや高いレベルの内容を学び、また興味を引く情報をランダムに自分のものにすればいい。しかし、別科は大学で十分にやっつけられる日本語能力を学生に習得させる予備校的プログラムであるから、覚えるべき事柄はしっかりと学習されなければならない。このポイントがしっかり守られれば、レベルの違ったクラスメートから学び合う学習環境を与えることで、自然な言語習得の環境が提供される統合クラスは、今回の様々な経験と論文執筆で、決してマイナスな授業形態ではないという結論に至った。



巻末資料：

XX生涯学習時事英語  
2007年秋学期

*Course Syllabus*

講座： テレビニュースで時事英語に親しむ

講師： 増山栄一エリック

E-mail:ericmasu@xxxxxx.ac.jp

日時： 9月29日／10月6, 13, & 27日／11月10 & 24日／

12月1, 8, 15, & 22日 (Total 10回)

土曜日2限 (10:40-12:10)

このクラスは生涯学習者のための時事英語のクラスで、レベルの違った学習者さんたちが、自分にあったレベルで時事英語ニュースを理解できるように、段階的に様々な内容のドリルやエクササイズを用いて、クラスを構成しています。そんな中で、自分の現在のレベルより、より高いところを目指して、学習していただきたく思っています。

授業はゼミ・セミナー式で行いますので、講師の講義よりも、皆さんに多くの質問をしながら、学んでいく形式を執って行きます。皆さんをあてていきますが、答えられなくても、あまり心配なさらず、ベストを尽くしてくだされば結構かと思えます。リスニングと語彙をフォーカスポイントにしていくクラスです。それで皆さんの英語力が向上されていくことを確信しています。

12月22日の最終日に期末テストとクラス発表を計画しています。このクラスの最後の仕上げに頑張ってみてください!!!

## **The Pledge of Allegiance**

**I pledge allegiance to the flag  
of the United States of America,  
and to the Republic for which it stands:  
one Nation under God, indivisible,  
with Liberty and Justice for all.**

XX生涯学習時事英語Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

Exercise #1: ビデオテープを視聴して、分かったことを書きなさい。

XX生涯学習時事英語Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

Exercise #2: ビデオテープを視聴して、次の問題に答えなさい。

どんな訴訟が起きていますか。

“Under God”の言葉はいつ「忠誠の誓い」に加えられましたか。

マイケル・ニューダウさんについて：

どの州に住んでいますか。

神の存在を信じていますか。

彼によると、“under God”はどんな宗教だと言っていますか。

マイケル・ニューダウさんの言い分は何でしょうか。(分かるだけ書きなさい。)

アメリカのリーダーは何をしてきましたか。

何年代に“under God”の言葉が加えられましたか。

どんな出来事が起きたので、それが加えられましたか。

ブッシュ政権下の法務省総裁であるテッド・オルソン氏はこの“under God”を法廷でどのように解釈しましたか。(分かるだけ書きなさい。)

マイケル・ニューダウさんの別れた奥さんはどんなことを話していますか。(分かるだけ書きなさい。)

XX生涯学習時事英語 Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

**Exercise #3: Answer the following questions with either T (for True) or F (False).**

- ( ) According to this report, the Supreme Court must now decide whether to remove the phrase, "under God."
- ( ) Michael Newdow does not believe the existence of God.
- ( ) According to Michael Newdow, "under God" violates the US Constitution.
- ( ) According to Michael Newdow, the government should stay out of religion.
- ( ) In the US, leaders do not pray to God in public.
- ( ) Communism believes in God.
- ( ) The Bush Administration agrees with Michael Newdow.
- ( ) Ted Olson called "under God" a ceremonial reminder.
- ( ) According to Ted Olson, "under God" is both religious and prayer.
- ( ) The girl's mother is Christian and loves the Pledge.
- ( ) Olson argues that Newdow has no right to bring this case in his daughter's name.
- ( ) The Supreme Court has two choices on this case.

XX生涯学習時事英語 Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

**Exercise #4: Fill in the blanks of the news script.**

JR: In Washington today, the US Supreme Court heard arguments in a lawsuit \_\_\_\_\_ . This involves just two words, “under God.” They were inserted into the pledge a half century ago. And, as Wyatt Andrews reports for us tonight, the Court must now decide whether to remove them.

CinB: ... which it stands, one nation, under God, indivisible...

WA: How could the two-word phrase, “under God,” \_\_\_\_\_ ?

MN: It was stuck in there for religious purposes.

WA: Michael Newdow, an atheist from California, who argued this himself, told the Supreme Court that “under God” is government-sponsored religion forced on his grade-school daughter. “I deny the existence of God,” he told the Court, “And the issue is, can the government put \_\_\_\_\_ ?”

MN: And this isn't God against no God. It's government getting re...involved in religion and government staying out of religion.

InB: “So help me God.” “So help me God...”

WA: Clearly, that's one tough argument, in a nation whose leaders pray to God all the time, in a nation that added that phrase back in the 1950s, (In background: “So help me God...”) when the threat of godless \_\_\_\_\_ .

CinB: “...one nation, under God...”

WA: Hundreds of people lined up outside of the court in support of those two words, “under God.” In court, the government defended the phrase not as a prayer but as \_\_\_\_\_ . Arguing for the Bush Administration, Ted Olson called “under God” a ceremonial reminder of how the nation was founded. It's not religious. It's not prayer. It's invoking all those institutions \_\_\_\_\_ . (In background: “How do you feel?”) And then there's this: The girl's mother, who has custody, says the daughter is Christian and loves the Pledge.

Mo: She was the first one to raise her hand to, um, lead her class reciting the Pledge.

WA: That led Olson to argue that Newdow has no right to bring this case in his daughter's name. And that \_\_\_\_\_ . It could toss this case completely, or decide the central question: Do we establish a religion, with “a nation under God”? (In background: “...of the United States of America...”) Wyatt Andrews, CBS News, Washington.

XX 生涯学習時事英語 Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

### Under God

JR: John Roberts

WA: Wyatt Andrews

JR: In Washington today, the US Supreme Court heard arguments in a lawsuit seeking to alter the Pledge of Allegiance. This involves just two words, "under God." They were inserted into the pledge a half century ago. And, as Wyatt Andrews reports for us tonight, the Court must now decide whether to remove them.

CinB: ... which it stands, one nation, under God, indivisible...

WA: How could the two-word phrase, "under God," violate the US Constitution?

MN: It was stuck in there for religious purposes.

WA: Michael Newdow, an atheist from California, who argued this himself, told the Supreme Court that "under God" is government-sponsored religion forced on his grade-school daughter. "I deny the existence of God," he told the Court, "And the issue is, can the government put that in my daughter's mind?"

MN: And this isn't God against no God. It's government getting re... involved in religion and government staying out of religion.

InB: "So help me God." "So help me God..."

WA: Clearly, that's one tough argument, in a nation whose leaders pray to God all the time, in a nation that added that phrase back in the 1950s, (In background: "So help me God...") when the threat of godless Communism threatened the peace.

CinB: "... one nation, under God..."

WA: Hundreds of people lined up outside of the court in support of those two words, "under God." In court, the government defended the phrase not as a prayer but as a simple American tradition. Arguing for the Bush Administration, Ted Olson called "under God" a ceremonial reminder of how the nation was founded. It's not religious. It's not prayer. It's invoking all those institutions that gave us freedom. (In background: "How do you feel?") And then there's this: The girl's mother, who has custody, says the daughter is Christian and loves the Pledge.

Mo: She was the first one to raise her hand to, um, lead her class reciting the Pledge.

WA: That led Olson to argue that Newdow has no right to bring this case in his daughter's name. And that gives the Court a choice. It could toss this case completely, or decide the central question: Do we establish a religion, with "a nation under God"? (In background: "...of the United States of America...") Wyatt Andrews, CBS News, Washington.

XX生涯学習時事英語Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

**Under God の単語**

**The Supreme Court**

**a lawsuit**

**The Pledge of Allegiance**

**to violate**

**an atheist**

**Communism**

**The Bush Administration**

**a ceremonial reminder**

**founded/to found**

**invoking/to invoke**

**institutions**

**custody/to have custody**

**to toss**



XX生涯学習時事英語 Dec. 1<sup>st</sup>, 2007

来週の子習教材：

## Toxic Toys in Gumball Machines

Although one would never expect it, there is a dangerous threat of lead poisoning to be found in the trinkets sold in gumball machines. Kara Burkhardt's son, Colton, swallowed a pendant from a gumball machine when he was four years old. As a result, he absorbed twelve times more normal level of lead in his bloodstream – enough to nearly kill him. In his future he could have behavioral problems or neurological damage from the lead poisoning. The Burkhardts sued the company that imported the horrendous pendant, and the government issued a recall of the products. According to their own tests, CBS found that six out of ten pieces of jewelry bought from a vending machine had enough lead to give a child lead poisoning. These results prompted the Consumer Product Safety Commission to do their own testing and consider a recall. In a lawsuit, the company blames the parents for failing to supervise their son. But Mrs. Burkhardt feels the company is only concerned about making money, and she warns somebody to be held responsible.